だけど…。」 「今まで、散々話してきました。

だから、もう話すのが怖いんです…。」 傷つけて、傷つけられて…。

「無視されて、否定されて…、

「…え?」

「…優しいんですね。」

「…でも…。」

「怖くなるほど、人を大事に思ってるんですね。」

そして、人生はもっと幸せになりますよ。」

これから、きっと話すのが楽しくなりますよ。

「…今まで、ダメだったのに?」

「もう、大丈夫です。

大事に思うだけじゃなくて、

大事にできる方法を…。」

だから、今から知ればいいんです。 「今まで、知らなかったからですよ。

フロローク Prologue

その人の目は乾いていた。この3週間、ろくに眠れなかったからだ。

"笑っていてほしい。

その夢を叶えるために、この1年、自ら立ち上げた会社で必死に働いてきた。会社 そばにいる人も、同じ電車に乗る人も、道ですれ違う人も、笑っていてほしい。

は急成長を遂げ、マスコミにも少しずつ取り上げられるようになった。

そして、講演会の依頼が来た。

たくさんの人に伝えられるチャンスだと思ったその人は、その依頼を快諾した。 …その講演会まで残り10分。会場には、1000人を超える人が集まっている。

それなのに、まだ何を伝えるべきか迷っていた。

ろくに眠らず1か月以上かけてつくった講演原稿もしっくりきていない。

ピコンッ!

Prologue

ため息をつきかけたその時、スマホからLINEの着信音が聞こえた。

数分後、繰り返しLINEのメッセージを読んだその人は、時計を確認し、講演会

のステージに向かって歩き出した。

¯あなたが悲しいと自分も悲しくて、…あなたが嬉しいと自分も嬉しい…か。」

投げた。 そう呟いたその人は、手に持っていた原稿をぐちゃぐちゃに潰して、ゴミ箱に放り

じて、拍手が鳴りやむのを待った。そして、マイクの前で口を開いた。 その拍手の中、ステージへ向かって歩き出した。ステージの中央に立った後、目を閉 ステージの脇に到着したと同時に、自分の名前が呼ばれ、会場に拍手が鳴り響く。

「今日は、僕に希望をくれた大事な人の話をさせてください。」 そう言って、前を向いたその人の目は潤んでいた。

Content

第一章 僕がコミュ症になるまで

5.「ラストオーダーです。」を心待ちにしていたのに…。 54	
第二章 僕ががんばってきたことに気づくまで	纮
4. 「関係ない。」って言われても…。 46	
3. 言葉が怖い本当の理由は? 40	
2.大事な人ほど、大事なことほど、伝えることが怖くなる。 26	
1.話したくないんじゃなくて、言葉が見つからないんだ。	

Contents

7 4 6 5 6 8

8

9. 8.

7. 「いいね!」がたくさん欲しかったけど…。

サザエさんと六本木と会社が嫌い。 ………………

6

						第						
20	19	18	17	16	15	第 三 章	14		13	12	11	10
嫌わ	一	なり	欲し	どる	目的	章	人が		が	悔	ね	なり
な人し	及決め	んでら	8 1.1	うない	的次	伴	が人た		んばっ	11	ん、	んでら
とば	かつは	かり	ものま	りたい	がで、	氏 が	を信じ		ってい	っての	こうよ	てるの
b b	りるし	13	を伝え	かか	見、	₩	しる四		いる	のは、	りれ	か
嫌な人とばかり過ごしていたら、心がすり減ってしまう。	一度決めつけると、その理由ばかり探しちゃう。	なんでやりたいことが変わるんだと思う?	いものを伝えないと、誰も何もできない。	どうなりたいか?の先に、どう思われたいか?がある。	目的次第で、見えるものが変わる。	僕が世界の見方を変えられるまで	人が人を信じる理由。		がんばっているのに、結果が出ないのは、	悔しいってのは、がんばってないと抱けない感情だよ。	ねえ、どうすれば良いと思う?	なんでやるのかって? やりたいからだよ。
して	その	が変れ	と、と、	光に、	もの	の日	:		結	んば	いと	?
いた	埋由	わる	誰	بخ	が変っ	兄 方			米が立	って	思う。	やり
5,	はから	んだり	も何ん	つ思り	わる。	を	i		出な	ない	?	たい
心が、	り探	と思	もでも	われ		変	į		いの	と抱い		からぶ
すり	しち	3.	きな	たい		え	į			けな		たよ。
減っ	やう。		0,1	か?		りわ			能力	い感		
てし			i	があ		る		i	がな	情だ		
まう				る。		ŧ			られ			
				i		で			てこ	i		
									能力がないってことじゃない	1		
							i		やな			
1	1	1	1	1	1		1	1 2 2	0		:	
6 5	5 9	5 2	4	3	1 3 2		1 2 6	2		0 8	9 9	9 4

第四章 僕が幸せをつくれるようになるまで

32. 伝えたい誰かがいるおかげで、伝えたい言葉が見つかる。 242
31. 伝えたいことは、全部物語で。
30. 僕にファン?ができた。 230
29. 結果を出すための行動を、結果が出るまで…。 225
28. 「どうなりたいか?」がわかったから、「どう思われたいか?」が必要になる。
27.あんなに人が怖かったのに、会いたくなった理由は? 218
26. 相手が自分に興味を持ってないんじゃなくて…。 212
25. 諦めるのは、誰? 204
24. 新しい行動をする時は、最初はうまくいかなくて当たり前。 199
23.最初から、かっこよくできることなんてないんだよ。 196
22. これ以上迷惑かけられないから。
21. 僕は、ロボットなんかじゃないから。

第五章 僕があの人の希望になるまで

33	34	35	36	37.	38	39		僕
営業成績トップよりも、嬉しいこと。	また、僕は一人になった。 253	自分をナメてるってことは、今まで出逢った人たちのことも…。 259	わかり合えなかったあの人も、自分と同じだったんだ。 270	どれだけがんばるか?じゃなくて…。	あなたは、私の希望だから…。 287	あなたが悲しいと、僕も悲しくて。あなたが嬉しいと、僕も嬉しくて…。	3 0 1	僕の人生を変えた40の言葉たち】

僕覚が一 コミュ症になるまで

言葉が見つからないんだ。・話したくないんじゃなくて、

朝、 そう思ってしまっているせいか、一日がやけに長く感じる。 玄関を出た瞬間から、もう家に帰りたくなっている。

と、ひどく疲れる。目を逸らして、車窓に映った自分の顔がそれと同じだと気づいて、 通勤中も、同じ電車に詰め込まれたサラリーマンたちの疲れている顔を見ている

にいても、気を遣って疲れる…。 仕事中もずっと疲れている。テンションが高い人と一緒にいても、無口な人と一緒

もっと疲れる。

とにかく人に疲れている。

-ピコンッ!

てしまう…。そうして、無価値な僕の無価値な毎日が過ぎていく。 そうして、クタクタになって家に帰って、やっと一人になれたと思った瞬間に、眠っ

が一カゴ100円で買える八百屋。Tシャツが50円で売られている洋服屋…、頻繁に コンビニの5倍ほどの大きさのチキンカツが160円で売っている総菜屋。バナナ

テレビの取材が訪れる激安商店街が有名な東京の北区、十条。

駅から、その商店街を通り過ぎて、5分ほどの場所にある、学生らしき若者ばか

ŋ

が住んでいる1ルームしかない4階建ての5万円のアパート。僕は、そこに8年間住

その僕の部屋に、LINEの受信音が鳴り響く。

んでいる。

『本当、一人好きだよね。』

2時間ほど前に、『遠慮するね。』と大学時代の友達の誘いを断ったその返信だった。

…違う。わかってない。

人が好きなわけじゃない。一人でいるのが楽なだけだ。

僕がコミュ症になるまで

☆

就職した直後から、仕事がストレスだった僕にとって、週末の友達との飲み会はい

い息抜きだった。…だけど、みんな学生の頃から、少しずつ変わっていった…。 そういう話が徐々に増えていった。そういう話と縁がない僕にとっては、ただただ 仕事の自慢話、昇進の話、昇給の話。結婚の話、妊娠の話、子育ての話…。

つまらない時間が増えていくだけだ。

僕が部屋に入った途端、話が止まった。そんなある日、飲み会に遅れていったことがある。

もっと遅く来ると思ってたよ。」

「なんの話してたの?」そう言われながら、迎えられた後、

と訊いてみたけど、みんなから苦笑いでごまかされた。悪口に違いなかった…。

そういう場面に出くわしたことは何度もあった。みんなで誰かの悪口を言っている

時に本人が来て、慌てて話題を変える。だけど、その悪口が自分に向けられることは、 なぜか想像していなかった…。

わずかな給料からお金を絞り出して、休みを使って、体力を使って、参加することが 対に遅刻しないようにした。だけど、ますます楽しくなくなった。楽しくもないのに、 それ以来、 悪口を言われないように、飲み会にはすべて出席するようにしたし、絶

達とは疎遠になった。 そして、みんなと別れた後に、ホッとしている自分に気づいてから、大学の時の友 バカらしくなった。

だけど、仕事の飲み会はそうはいかない。プライベートの飲み会は、行かなければいい。

「つまんないですか?」 今まで何度そう言われたか数えきれない。職場の飲み会やお客さんとの飲み会で、

半年に1回のペースでそう言われてウッとなってしまう。

第一章 僕がコミュ症になるまで

つまんないんじゃなくて楽しませる言葉をいつも考えている。だけど、その言葉が

「つまんないなら帰れば?」

見つからなくて話せないだけだ。

スマホをいじっていた。でも、それも周りに気を遣わせないようにスマホに夢中に 中にはそんな160キロクラスの直球をぶつけてくる強者もいる。 確かに、その時、

なっているフリをしていただけなんだ。

るために、使う当てのないバファリンまで持ち歩いている。 最近は、「偏頭痛持ちで」という嘘で場を収めるようにしている。信憑性を持たせ

☆

鈴木達也、 8年前に今の会社に入ってからろくなことがない。 30歳。ウェブサイト制作会社の営業部で働いている。

就職活動をしている時、履歴書の特技の欄に書けることがなかった。 仲が良かった

友達の履歴書を見せてもらうと、『英会話』と書かれていた。「こいつ…。」と思った。

一緒にいる時に、外国人に道を訊かれて、

「ゴーストレート(この道をまっすぐ」を

「ゴーアウェイ(立ち去れ)」と言って、

「ファッ○ユー!」と言われていたくせに…。

はめになるのに…。 ることになったら? 一生、履歴書の特技の欄に『英会話』と書いたことを後悔する こいつは何も考えていない。もし、将来通訳とかやらされたら? 海外赴任とかす

の欄に『なし』と書いて履歴書を提出した。 その結果、書類選考で30社以上に落とされ続けた。 僕は恥をかきたくない。そして、それ以上にがっかりされたくない。だから、特技

友達にそうボヤいたら、「たった2、3枚の紙きれで一体何がわかるんだろう?」

第一章 僕がコミュ症になるまで

「パパッと見て、判断してるらしいよ。」

と言われた。

のが今の会社だ。 イクダンス』と書いて提出した。そして、初めて面接まで進み、内定を唯一もらった パパッと見るだけなら…。そう思って、特技の欄に、学生時代にやっていた『ブレ

☆

「鈴木君、ブレイクダンスやってよ!」

パパッと見てるんじゃなかったのか?─本気でファッ○ユー!だ。 ス』なんて書いたことをすっかり忘れていた。というかなんで部長は覚えてるんだ-頭をフル回転させて、部長の無茶ぶりをごまかすための理由を探した。

新入社員の歓迎会で部長からそう言われた。その時まで、履歴書に『ブレイクダン

たり、首で全身を支えたりする。1か月休むだけで、感覚を取り戻すのに1週間はか 本当に無茶だった。ブレイクダンスはバランスと筋力が必要なダンスだ。逆立ちし

かる。それなのに、僕は5年以上踊っていなかった。

だけど、特技の欄に書いてしまった以上、その言い訳は通用しなさそうだ。

「…部長、音楽がないと踊れないんですよ。」

やっとのことでひねり出したその答えを部長は、自分へのフリだと勘違いした。 結 部長の十八番の10年以上前に流行ったポップソングに合わせて踊ることになっ

た。…地獄の始まりだった。

…。」という声もかすかに聞こえた。 きった。だけど、グルグル回るのを期待していた周りからの拍手は微妙で、「なんだ 案の定、リズムは取りづらいし、体は重い。それでも、なんとか差し障りなく踊り

『なめるんじゃないよ。』酒が入っていたせいもあって、火がついてしまった。 体の隅々まで酒が回った状態で頭で回ろうとした。頭を床についた途端、

僕がコミュ症になるまで

という歓声が聞こえた。

『見てろよ!』その歓声に勢いづいた僕は、逆さまになったまま思いっきり体を回し

た。

次の瞬間、ボキッという音が響いた。次に、女性社員の甲高い悲鳴も響いた。

に乗った自分に、こう言ってやりたい。 …骨折していた。5年間のブランクはやっぱり大きかった。時間を巻き戻して調子

゙なめるんじゃないよ!」

定だった新人研修も終わっていた。 次の日から、1か月間入院するはめになった。 退院して出社した時には参加する予

「あっ、首折り人だ。」

を見て、ますます時間を巻き戻したい欲求に襲われた。 同期からそう言われてクスクス笑われた。そして、明らかに仲良くなっている同期

この8年間、会社に居場所がないと感じている。

営業部に配属されている僕の成績は下の下。成果報酬制のせいで、給料は15万円に

…まあ、それ以前に相手もいないけど。 も満たない。貯金どころか生活は毎月ぎりぎりだ。これじゃあ、結婚なんてできない。

学生時代から20キロも増えた体重のせいでたるみきった顔、ズボンの上にの

るお

腹、 知りに加えて、あまりに乏しいコミュニケーション能力…。 …ハンデあり過ぎて、嫌われることも納得だ。だから、最近はこう思っている。 股ずれする太い足…、そんな誰からも愛されない外見だけでも十分なのに。 人見

どうせ終わる関係だから、 最初から始まらない方がいい。

僕がコミュ症になるまで

伝えることが怖くなる。2.大事な人ほど、大事なことほど、

『達也だよね?』青希だけど、久しぶり!』

その文字がスマホに表示された瞬間に、心臓が耳に貼り付いたかと思うほど胸の鼓

動が大きくなった。

た。 まっているその贅肉は昔はなかった。それどころか、僕の腹筋はバキバキに割れてい 最近お風呂で無意識に揉んでしまっているお腹の贅肉。最近は、愛着すら感じてし

ずーーーっと笑っていたからだ。

それはブレイクダンスをやっていたからでも、筋トレをしていたからでもない。

そして、腹筋が割れるほど笑い続けていたのは青希がいたからだった。

あの時間が人生で一番楽しかった。

「長崎市からどれくらい?」

「車で1時間半くらい。」

「…遠いね。」

ド田舎、長崎県の西海市で、僕は18年間を過ごした。 今まで、何度この会話を繰り返してきたかわからない。 長崎市から車で1時間半の

その3つしか僕たち子供には選択肢がなかった。 なるか、 センターもない。コンビニに行くにも車が必要。そんな街だったので、部活に夢中に 海 で川や山。 漁師や農家の親の手伝いに駆り出されるか、テレビゲームに夢中になるか、 自然がいっぱいで、というか自然しかない…。 遊園地どころかゲーム

を持て余していた。そんなダラダラ過ごしていた小学3年生の春に、初めて一緒のク ラスになったのが藤原青希だった。 らえない僕はゴロゴロし過ぎて、小学3年生の夏休みで体重が5キロも増えるほど暇 なのに、部活にも入らず、親が漁師でも農家でもなくて、テレビゲームも買っても

青希は、 小学3年生にしては大人びていた。 当時、 思春期真っ只中の男子の中で、

女子に対して、にこやかに話しているのは青希だけだった。

先生に対してもそうだった。当時、授業中に手を挙げるやつなんて先生に媚びてい

して、先生を喜ばせていた。 ると見なされていた。だけど、青希は興味があることは手を挙げて質問していた。そ

それどころか、みんなから好かれていた。言いたいことを言って、訊きたいことを訊 いて、やりたいことをやる。 それなのに、青希は誰からも嫌われていなかった。いじめられることもなかった。

僕自身が誰よりも青希に惹かれていた。 そんなできそうで、だけどできないことができる青希は憧れられていた。そして、

に胸が高鳴った。 たし、放課後に、青希の家に初めて誘われた時は、好きな子の隣の席になった時以上 だから、青希から「達也」って初めて名前を呼ばれた時は、天にも昇る気持ちだっ

そして、青希の家に着いた後、それ以上に胸が高鳴ることが起きた。

「達也、ダンスやらない?」

青希からそう言われた瞬間、意味がわからなかった。

タッと止まったり…。 たくさん出てきた。その人たちが逆立ちして回ったり、 ポカンとしていた僕に、青希はビデオを見せてくれた。そのビデオには、 片手で体を支えたまま、ピ 外国人が

同じ人間とは思えないほどスピーディーで華麗な動きをしていた。

その日からブレイクダンスを始めた。来る日も来る日も青希の家の海風でさび付いて それなのに、ブレイクダンスの方が部活よりもよっぽど難しそうだったのに、僕は 僕が部活に入らなかったのは運動神経が悪く、バカにされるのが怖かったからだ。 その姿に、僕は一瞬で虜になった。それが僕とブレイクダンスの出逢いだった。

かった僕のダンスも、それなりに上達した。そりゃあ、それだけ練習すれば誰でもう その 生活は小学3年生から高校2年生までの8年間続いた。 最初は見るに堪えな

いるガレージで練習し続けた。

第一章 僕がコミュ症になるまで

ダンスでつけるようになった。それがブレイクダンスの起源だと青希に教えてもらっ ブレイクダンスはアメリカが発祥地だ。ギャングの抗争の決着を銃撃戦の代わりに

曲に合わせてアドリブで踊る。ブレイクダンスに正解も不正解もない。膝が曲がって すごければ良い。観ている人が感動すればなんでも良い。 にしても、なんの曲がかかるかは踊り出す直前までわからない。だから、ダンサーも いても、背中が曲がっていても良い。回転してもしなくても良い。美しければ良い。 1対1や2対2で戦う場合もあれば、3人以上のチームで戦う場合もある。 いずれ

ンスに夢中になった理由のひとつだ。 どこまでも自由で、だからこそ、どこまでも追求できる。それも、僕がブレイクダ

かった。というか、自分一人では勝てる気がしなかったから避けていた。 ダンスを始めて1年ほど経った後、青希と一緒に大会にも頻繁に出るようになっ 1対1のトーナメント制の大会が多かったけど、それに出ることは結局一度もな

青希は、1対1の大会に出ても絶対に優勝できる実力だったのに、なぜか2対2の大 会にしか出なかった。多分、僕に気を遣ってくれていたんだと思う。 だから、青希と一緒に出場できる2対2のトーナメント制の大会しか出なかった。

なった。優勝したことも何度かあった。全部、青希のおかげだった。 小学生の頃は 1回戦負けばかりが続いた。だけど、 中学生になると勝てるように

長崎 あの頃は本当に楽しかった。 の夏はとにかく暑い。 海が近くにあったせいで、暑いだけじゃなく蒸していた。

は踊れなくなる7時過ぎまで、毎日5時間練習し続けた。だけど、もっともっと踊り まとわりついていた。 練習の疲労で震える体に、大量の汗で重くなったシャツとズボンが、いつもしつこく 高校2年生の夏休みは、特にハードだった。午後2時から、日が暮れてガレージで

世界大会の予選突破。それが僕らの長年の目標だった。

続けていたかった。

第一章 僕がコミュ症になるまで

ダンサーたちと同じ大会に出られる。そして、大観衆の前で同じ舞台に立つことがで 日本での予選を突破すると、日本代表として、ずっとビデオで見続けていたトップ

許可をもらえていた。そうして、ようやく巡ってきたチャンスに心まで踊っていた。 かった。だけど、高校2年生になったその年、僕も青希も、やっと親から東京に行く きる。まさに夢の舞台だった。 その予選は、 毎年、東京で開催されていたせいで、ずっと参加することはできな

だけど、その楽しい日々は、憧れの東京に行く前に、突然終わった…。

☆

「うわー! そうなったら、やばっ!」「あの人と対戦するかもよ!」

で以上に練習に打ち込んでいた。 れていた。そして、その妄想を現実にするために、僕と青希は、予選に向けてそれま ビデオで見て憧れていたダンサーたちと対戦できるのを妄想して、僕らは毎日浮か

希の家のガレージで練習の予定だったのに、僕はすっかり寝過ごしてしまった。 よいよ明日に世界大会の日本予選を控えたその日。昼の2時から、いつも通り青

家まで起こしに来てくれていた。壁に掛けてある午後3時と表示されている時計を見 て、気まずく謝る僕に、「寝つけなかったんだろ?」と青希は笑った。 人の気配を感じて目を開けると、目の前に青希の顔があった。 青希はわざわざ僕の

「うちで待ってるから、ゆっくり準備して来なよ。」

家を飛び出した。 そう言い残した青希は先に帰っていった。その後、僕はシャワーを浴びて、慌てて

踊 なって青希の家のインターホンを鳴らした。だけど、いくら待ってもなんの反応もな かった。 り始めた。だけど、30分が過ぎても青希は一向に姿を現さない。さすがに心配に 最初は、トイレでも行っているんだろうと思ったので、大して気にもとめず軽めに 青希の家のガレージに着くと、先に着いているはずの青希の姿がなかった。

仕方がないので、ガレージに戻って踊った。青希の携帯にも何度も電話したけど繋

第一章 僕がコミュ症になるまで

がらなかった。そうしているうちに、胸のあたりにあったかすかな不安が大きくなっ

―ガツー

ていった。

と思ったが、振り向いた先には青希のお母さんの顔があった。毎日遅くまで仕事をし いきなり肩を乱暴に掴まれ、強引に振り向かされた。一瞬青希がふざけているのか

ているおばさんが、この時間に帰ってくるはずがないのに…。

んの強張っている、いや、怖がっている表情を初めて見たことだった。 でも、それ以上に驚いたのは、典型的な優しいお母さん、そんなイメージのおばさ

「…おばさん、青希は?」

息を切らしているおばさんの答えを待った。

「ハアハアハア、青希が…。」

「…青希が車に轢かれたの…。」

34

言葉を、喉の奥から無理やり引っ張り出している。そんな感じだった。

かせた。そして、がっかりしたはずだったのに、病院へ急がなきゃいけなかったのに、 多分、おばさんは、僕を青希と間違ったんだろう。だから、僕の肩を掴んで振り向

僕に答えてくれた。

…それなのに、僕は返事すらできなかった。

から電話があった。電話の後、教えてもらった病院にすぐに自転車を走らせた。 その日から1週間後、何もできず引きこもっていた間抜けな僕に、青希のお母さん

 $\stackrel{\wedge}{\simeq}$

どんな部屋だったのか? どんな顔で病室に入ったのか? 思い出せるのはベッドに横たわっている青希の姿だけだ。 病院までどれくらいの時間がかかったのか? 病室で青希を見た時、最初はそれが青希かどうかわからなかった。 青希の病室は何階だったのか? 全部思い出せない…。 青希の顔

大きなガーゼが貼られていたけど、それでは隠すことができない傷が顔の至る所に

第一章 僕がコミュ症になるまで

あった。夏用の半袖の病院服のせいで、腕に巻かれている包帯も目立った。

た。いや、左足だけが見えた。…右足はいくら探しても見当たらなかった。 暑かったせいか、掛布団はベッドの横に置かれていて、そのせいで青希の足が見え

…青希の右足がなくなっていた。事故で右足の膝から下すべてを失っていたのだ。

さんに促されて病室を後にした。 のに体中が震えて、それなのに大量の汗が床に落ちていた。そんな僕を見かねたおば しばらく青希を見ているうちに、気づくと呼吸が苦しくなっていた。そして、夏な

ずっと天井を見続けていた瞳も…。 右足をなくしてしまった姿も。感情が見えない顔も。一度も僕の方を見ることなく、 家に帰ってからも、ずっと青希の姿が頭から離れなかった。

「…青希を励ましてもらいたいの。」

おばさんの声が枯れていたことはわかった。 それから数日後の夜遅くに、また青希のお母さんから電話があった。電話越しでも、

翌日、病院に行くと青希は起きていた。だけど、ずっと窓の外を見ていて一度も目

が合うことはなかった。

じた。 そんな青希を見ていると、まるで自分がこの世界から消えてしまったかのように感

「青希…、大丈夫だよ…、がんばって…。」 気がつくと、呆れるほど頼りない声で、僕は青希に話しかけていた。

「…もう、達也には関係ない。」

暗になったこと以外は。 青希からその言葉が返ってきた後のことはよく覚えていない。目に映る世界が真っ

は誰もいなかった。まるで、昨日までの出来事が夢だったかのように、布団もマット レスもすべてが空っぽに片づけられていた。 僕はまた青希の病室に行った。だけど、青希が寝ているはずのベッドに

その翌日、

僕がコミュ症になるまで

「リハビリ施設に移ったよ。」

えてくれた。その後、長い長い夏休みが明けて学校に行った時、ホームルームで青希 が高校をやめたことを担任から聞かされた。それからずっと青希には会っていない。 昨日、一部始終を気まずそうに見ていた隣のベッドのおじさんが、気の毒そうに教

にしなかったら、青希はいなくならなかったのかもしれない。 かった。何をがんばるのかなんて想像すらつかなかったくせに…。もしその言葉を口 大丈夫なのかなんて僕もわからなかったのに…。「がんばって。」なんて言わなきゃよ 今でも、あの日を後悔している。「大丈夫だよ。」なんて言わなきゃよかった。何が

あれ以来、僕は言葉が怖くなった。

大事な人ほど、大事なことほど、僕は伝えることが怖くなる。

